

三つの出会い

中村弓子

今年四月二十四日の新聞は一斉に「アリの町」のゼノさん死去を報じた。このゼノさんをめぐる素晴らしい三つの出会いを語る二冊の本をご紹介します。

松居桃樓著『ゼノ死ぬひまない』（春秋社）

松居桃樓著『アリの町のマリア北原怜子』（春秋社）本書にはイタリア、スペイン、オランダ語訳がある。

ゼノさんはロシア領ポーランド東北の片田舎の農

家に生まれた。軍人生活をした後、一獲千金を夢みて様々な職業を転々とする放浪時代が続いた末に無一文になってクリスマスに家に戻るとゼノさんのことを心から心配していた母親の葬式が他ならぬその日にすんだところだった。聖書の喩えの放蕩息子と同じことになってしまったという思いと共に、何にならなくても良いから信仰深く天国に行く人間になつて欲しいという母親の願いがゼノさんの心に染みこんだらしい。その後間もなくゼノさんは修道院に

入ることを決意する。しかしまだどこか気軽なところがあり、あまり辛かったらこれも一つの勉強だったと考えて結婚しようと思っていたらしい。入る修道会も規律が比較的ゆるやかで服装も立派な会を選んだつもりだった。ところがゼノさんのたまたま廻された修道院では丸坊主にされてしまい、やる仕事は床掃除ばかりで憤懣やる方なく、まんじりともせぬある真夜中、とうとう院長のコルベ神父の部屋のドアを叩いて叫んだのだった。自分は女中じゃない、もう修道院を出て家に帰る、と。「この時コルベ神父が何を説き、ゼノさんが何をどう納得したのか、ゼノさんから聞くことはできない。だがそれはその時の印象が薄かったからではない。その時心に深く刻み込まれたものが何だったのか、彼は語る言葉を持たないのだ。(……)ゼノさんはこの夜を契機として一変した。この夜、心の底に触れた何ものか

によって。それが何であるかを彼は生涯いうことはないだろう。名づけて呼びえないもの、名づけければ

もうそれではなくなってしまうもの。ただ心から心に伝わることだけが可能なもの。その夜ゼノさんの心はコルベ神父のほほえみを見ただけだったのかもしれない。」

後にアウシュヴィッツの収容所で一人の脱走者を出した報復として十人が餓死刑に選ばれ、そのうち一人が妻と子の名を呼んで彼らを残して死ぬのは耐えられないと叫んだ時、その身代りを申し出て死んでいったのが他ならぬこのコルベ神父であった。助けられた人ガイオニチェック氏はその時コルベ神父はほほえんでいたと語っている。

ゼノさんはこのコルベ神父に伴って長崎に来たのだが、教会の事業のために寄付を集める時「恥は自分のためにかき、寄付は聖母マリアのために貰え」と神父に教えられた。この心は終戦後の恵まれない人々に対するゼノさんの救済事業の中に生き続けた。

この救済事業の出発点はゼノさんの属する長崎の修道院が戦災孤児のために作った孤児院だった。そ

のための孤児集めをやっているうちにやがてゼノさんは浮浪児を追って全国を回り出したのだった。そのやり方は独特のもので、行く先々でアメを配りながら新聞記者に写真をとってもらい、その新聞記事を持ち歩いて材木集めをする。「その材木で家が建ちそれがまた新聞にのると今度はそれを持って役所に出かける。〈これほど地元の人々の善意が盛り上っているのだから〉と土地を手に入れる交渉を始めるのだ。ムダ弾は一発も撃たない。」こうしたやり方はしばしば売名行為と批判された。しかしそれをものともせず飽くことなく天真爛漫にそれを続けてゆくところにあの「恥は自分のためにかき寄付は聖母マリアの為に貰う」という信念が脈々と生きていたのだ。

ゼノさんはそうした救済事業のかたわらで一般人には「カワイソウナ人ノタメオ祈リタノミマス、聖母マリアサマ、オメグミタクサンアリマス」と言いながら手当り次第に聖母のカードを配っていた。あ

る日浅草の大きな履き物問屋から応対に出てきたお嬢さんがこうしたカードの一枚をゼノさんから受取った。それが北原怜子だった。ほとんどの人にはすぐ捨てられてしまうカードとゼノさんの言葉が怜子の心に深く残った。やがて新聞記事によってそれがアリの町の救済に一役買っているゼノさんであることを知る。ほどなくしてゼノさんがまた家の前を通るのを見かけた怜子は思わず雨の中を傘もささずにゼノさんを追い、迷い、ずぶぬれになってアリの町にたどりつく。怜子はマリアのカードを見せ、ゼノさんは怜子の澄み切った目を見て、「この娘はただものではない」と直感する。帰りにゼノさんはわざと隅田川のほとりを遠廻りして怜子に野宿の人々を見せた。その日から怜子はゼノさんの片腕となってアリの町と周辺の浮浪者部落への奉仕生活に献身してゆく。

コルベ師とゼノさんの出会いもゼノさんと怜子の出会いも深い出会いに独特の美しい単純さに満ちて

いる。

しかしアリの町とゼノさん及び怜子との出会いは決して単純なものではなくそこには一つの実に緊迫したドラマが潜在した。

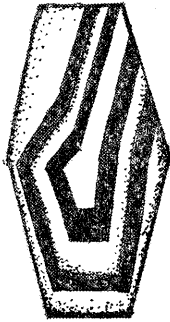
ゼノさんは例によって天真爛漫にアリの町にやって来て「アナタガタナニホシイデスカ、タベモノデスカ、材木デスカ」とやり始め、例によって新聞社を呼ぼうと言う。アリの町は浮浪者の巢ではなくパタヤをやることよって自力更生しようと団結している区域であったが一番恐れていたのは当局から立退きを命ぜられることであった。外人の宗教家が後援してくれるというニュースが出れば世論の支持を呼ぶのにこの上なく有難い。だがゼノさんからただ喜んで貰ったとなると自力更生と反対のことになってしまう。そこで仕方なくアリの町のブレンである「先生」と呼ばれる男が思いついた演出が、生活とは関係のない建物である教会を建てることについてゼノさんが協力を申し出たとして新聞記事にして貰う

ことであった。怜子が見たのもこの記事であった。

しかし「先生」はじめアリの町の人々はその場しのぎのこの演出のことをすっかり忘れてしまっていた。ところが半年ほどして建てた共用の二階家に対して都の役人から取り壊し命令が来た時、アリの町の人々はとっさにあの演出の件を思い出しその屋根の上に急造の十字架をつけてまたその場をしのいでしまったのだった。教会も十字架もアリの町の人々にとっては演出であり方便であった。しかしその演出であり方便であったものがゼノさんと北原怜子という二人の人間によって逆転させられてゆく。ゼノさんの天真爛漫な信仰によって。怜子の絶対的自己犠牲の心によって。アリの町のドラマはそこにある。アリの町にかかりきりになった怜子は「先生」から、助ける人が上で助けられる人が下の「助けてやる」を自己満足で押しつける宗教家の慈善というものを情容赦なく批判される。そのつど怜子はそれを受け入れ引き退るのだが、引き退るごとにその自己犠牲

は深化しました同時に相手をも変容させていったのだ
った。通いの奉仕からアリの町に住みこみ生命を燃
焼し尽すに至る怜子の歩みはシモーヌ・ヴェイユの
工場体験における「受肉」と呼ばれたものをも思い
出させる。そして「先生」と怜子の緊張関係とそれ
故の最終的相互理解はヴェイユとテヴァン夫人のそ
れ、「プロレタリアートは選び取る状態ではありま
せん」という言葉をつきつけたテヴァン夫人とのそ
れをも連想させる。

この二冊の本に描かれた出会いの第三のもの、そ
れは北原怜子と「先生」のそれである。そして「先



生」とはこの二冊の本の著者、松居桃樓氏に他なら
ない。

その松居氏は『北原怜子』増補版の序でこう言っ
ている。自分は長い間アリの町に住みいわゆる《人
生のドン底》から社会事業家やポランティアを多く
見てきた。「そしてつくづく感じたことは《気の毒
な人を助ける人》はいくらでもあるが、その《気の
毒な人》を神だと思つて心から敬愛して奉仕する人
はめったにいないということです。」

(お茶の水女子大学)